

甌島平良方言の敬語

森 勇 太

1 はじめに

鹿児島県の離島、甌島列島では集落ごとのことばの差異が大きい。敬語も例外ではなく、集落ごとに多様な運用が見られる。本稿は、その甌島列島の中甌島・平良集落における敬語について述べるものである⁽¹⁾。

平良集落において、上位者に対する疑問文では、助詞カナの使用が重要である。敬語接辞ラルも見られるものの、その使用は必須でない。ラルは主に第三者待遇で現れる。

(1) a 対話, 聞き手=上位者

アイタ ヤクバニ イクトカナ。

aita jakuba=ni ik-u=to=kana.

明日 役場 = 与格 行く-非過去 = 準体 = カナ

「明日役場に行きますか。」

《聞き手待遇》

b 独話, 主語=上位者

アノ センセー ヨカ フク キトラルナー。

ano seNsee jo-ka huku ki-tor-ar-u=naa.

あの 先生 良い-非過去 服 着る-継続-ラル-非過去 = ナ

「あの先生、いい服着ているな。」

《第三者待遇》

上村(1954)も、甌島で助詞カナが“丁寧な疑問”に用いられることを指摘しているが、詳しい待遇的な機能については明らかにされていない。本稿ではこのような平良方言の敬語の運用について述べるとともに、日本語の敬語の中でどのような類型として位置づけられるか、考察したい。

本稿の構成は以下の通りである。2節では甌島・甌島方言の概況について述べる。3節では平良方言の敬語を聞き手待遇・第三者待遇・行為指示に分けて記述する。4節では助詞記述の補足として助詞ナノの運用について詳しく見る。5節では平良方言の敬語について、標準語や日本語諸方言と比較してどのような位置づけができるか、

考察する。最後の6節はまとめである。

2 甑島方言

2.1 概況

甑島列島は、本土から西方約40kmの東シナ海上に位置する列島で、有人の島は上甑島(45.08km²)・中甑島(7.29km²)・下甑島(66.27km²)の3つである。

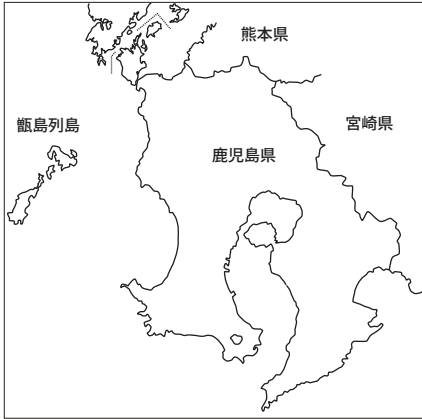


図1 甑島列島の位置

方言区画上(東条 1953)は薩隅方言域に分類されており、二型アクセント・敬語モスの存在等の特徴は薩隅方言と連続しているが、一方で、主格助詞ノ・対格助詞バ・形容詞カ語尾の存在など肥筑方言的特徴も併せ持つ。甑島列島は地形が急峻で、もともと人の移動が活発ではなかった。言葉の面でも、隣接する集落であってもことばが違うという意識がまみられる。

本稿で扱う平良は中甑島唯一の集落である。合併前の行政区画上は甑島郡上甑村大字平良(現在は薩摩川内市上甑町平良)で、旧上甑村の中心は上甑島の中甑にあった。1993(平成5)年に上甑島と中甑島が橋で結ばれる前は、船により移動するしかなく、移動に不便な環境にあった。人口は263人(2015年4月1日現在の住民基本台帳人口)で、旧上甑村の中では2番目に大きい集落ではあるが(1位は役場のある上甑町中甑で488人)、甑島内では大きくない⁽²⁾。



図2 各集落の位置

2.2 甌島方言の敬語

甌島では近世期に、里と手打に武家屋敷が置かれており、それらの地点では敬語がよく使われているという意識が聞かれる。甌島方言の敬語形式・運用について、まとまった記述は多くないが、里方言については、森・平塚・黒木（編）（2015）に記述がある⁽³⁾。里方言は主格待遇接辞（尊敬語）ヤル（-jar）と丁寧接辞モス（-mos）を持つ。主格待遇接辞は基本的に主語が上位者のとき、丁寧接辞は聞き手が上位者のときに用いるものである。話者は、運用上、ほぼ義務的に用いるという意識をもっている。

一方、甌島列島内では、ラル（-(r)ar）が存在する地域もある。里にもかつてあったとされるが、現在では、もともと平民の住む蘭下・村東地区の形式として意識されている。かつて武家が多く住んでいた蘭上等の集落ではラルが用いられていない⁽⁴⁾。

(2) a 爺の田打ちばしとらったつうで、^{さある}猿の来て、そん田打ちば見とって、

b 「うんにゃ、あつかのしんどうか仕事しおらいならあ、おもして加勢すらあ」
（昔話、勝々山、話者濱なつ氏は蘭下の出身）

さて、敬語の記述にあたっては、どのような形式が存在するかどうかだけではなく、その形式がどのくらい義務的に使い分けられているか、という情報も必要である。本稿では、敬語の記述にあたって、西尾（2015）の“遂行義務性”という概念を導入したい。遂行義務とは、“場面要素を考慮して「言わなければならない」という言語行動の性質（西尾 2015：99）”とされる。標準語では、聞き手待遇において、上位者に対して少なくとも丁寧語を使うことは必要不可欠である [→(3a)]。しかし、友人に対する私的な会話で (3b) のような敬語のない発話がなされるように、第三者待遇表現が抑制されているということが指摘されている（井上 1981） [→(3b)]。

(3) a [先輩に対して] 先輩、明日大学来ますか？

b [友人に対して] 先生もう学校来た？

この状況は、親しい人物と話す場面では、第三者待遇における尊敬語使用の遂行義務性は高くないが、聞き手待遇場面において、丁寧語使用の遂行義務性は高いと説明できる。また、聞き手待遇・第三者待遇にかかわらず、ヤル・モスがほぼ義務的に用いられるという甌島里方言は、場面に関わらずヤル・モスの遂行義務性が高いものと捉えられる。

3 平良方言の敬語

3.1 調査の概要

平良方言の調査は、2012-2015年に面接調査で行った。インフォーマントは男性2名（男性1 = 1940年生、外住歴なし／男性2 = 1936年生、25歳から4年間愛知県に居住）である。結論から先に述べると、平良方言のものとして確認された敬語形式は以下の3種類である。

- (4) a ヤル (-jar)
 b ラル (-(r)ar)
 c 疑問助詞カナ (=kana)

里に見られるモス (-mos) が用いられることはあるが、平良のことばとしては意識されていない。特定形（敬語動詞語幹）や、斜格尊敬表現（謙讓語）を作る表現は確認されていない。助詞カナについて、カとナに分けて分析する方法も考えられるが、本稿ではカナはひとつの助詞として、カやナとは別の助詞として分析する。

なお、敬語接辞が適用される対象は誰か、いわば上位者と認める条件は何かという点は年上ということが重要なようである。また、家族内の年上でも家族外の目上の人物と同じように待遇される。また、年の離れ具合や、あるいはお坊さんや先生といった職業上の違いなど、待遇する人物を変えても聞いているが、待遇する形式は変わらなかったため、本稿では親疎による区別はあまり大きくないと考え、以降の考察では除外する。以下、聞き手待遇を3.2節で、第三者待遇を3.3節で、行為指示を3.4節で述べる。

3.2 聞き手待遇

3.2.1 疑問文

3.2節では、聞き手となる人物が主格となる場面について述べるが、まず、3.2.1節では、上位者へ質問する場面について確認する。上位者の聞き手に対しては(5)の表現を用いる⁽⁵⁾。

- (5) a 聞き手=上位者
 アイタ ヤクバニ イクト {カナ / コー / ナ / #カ}。
aita jakuba=ni ik-u=to }=kana / =koo / =na / #=ka}.
 明日 役場 = 与格 行く - 非過去 = 準体 { = カナ / コー / ナ / # カ }
 「明日役場に行きますか。」

b 聞き手=下位者

アイタ ヤクバニ イクト {#カナ / #コー / ナ / カ}。

aita jakuba=ni ik-u=to /#=kana / #=#koo / =na / =ka/.

明日 役場 = 与格 行く-非過去 = 準体 |=#カナ / #コー / ナ / カ|

「明日役場に行くか。」

疑問文では4種類の助詞が見られた。その中でも普段用いる形式と意識されているのはカナとカであり、カナは上位者に、カは下位者に対して用いる。コーは年齢が少し離れた年上の人に使う形式である。ナは目上にも目下にも使えるという内省が見られたが、カとナを比較すると、ナのほうが丁寧な形式であるということであった(ただし目上に対する回答を問うと、カナのほうが早く回答される)。

なお、上位者が主語になるとときには、ラルをつけた形式も容認される。

(6) 聞き手=上位者

アイタ ヤクバニ イカットカナ?

aita jakuba=ni ik-aQ=to=kana.

明日 役場 = 与格 行く-ラル:非過去 = 準体 = カナ

「明日役場に行きますか。」

ラルは下位者に対して用いることはできない。しかし、上位者に対して必ずこの形式を用いなければならないというわけではない。疑問文では、カナが使用されていれば、ラルの使用・不使用は問題にならない。言い換えれば、敬語形式としてラルは存在するが遂行義務性は高くない。

3.2.2 平叙文

次に、聞き手を主語にして、聞き手のことを言及する場面について見る。

(7) a 聞き手=上位者

オマヤー ヨカ フクバ キトル {ナー / #ニヤー}。

omajaa jo-ka huku=ba ki-tor-u /#=naa / #=#njaa/.

2 単:主題 良い-非過去 服 = 対格 着る-継続-非過去 |=#ナ / #=#ニヤー|

「あなたはいい服を着ていますね。」

b 聞き手=下位者

アッカー ヨカ フクバ キトル {ナー / ニヤー}

aQkaa jo-ka huku=ba ki-tor-u /#=naa / =njaa/

2 単:主題 良い-非過去 服 = 対格 着る-継続-非過去 |=#ナ / ニヤー|

(70)

「あなたはいい服を着ていますね。」

(8) a 聞き手=上位者

オマヤー ヨカ フクバ キトラルナ。

omajaa jo-ka huku=ba ki-tor-ar-u=na.

2単:主題 良い-非過去 服 = 対格 着る-継続-ラル-非過去 = ナ

「あなたはいい服を着ていますね。」

b 聞き手=下位者

アッカー ヨカ フクバ キトラルナ。

aQkaa jo-ka huku=ba ki-tor-ar-u=na.

2単:主題 良い-非過去 服 = 対格 着る-継続-尊敬-非過去 = ナ

「おまえはいい服を着ているね。」

(9) a 聞き手=上位者; 薬を飲んだか忘れたという人に対して

オマヤー イゼン クスリバ {ノモラッタター/

omajaa izeN kusuri=ba {nom-or-aQ-ta=taa/

2単:主題 さっき 薬 = 対格 {飲む-継続-ラル-過去 = 終助詞/
ノモッタター}。

nom-oQ-ta=taa/.

飲む-継続-尊敬-過去 = 終助詞

「あなたはさっき薬を飲んでいましたよ。」

b 聞き手=下位者; 薬を飲んだか忘れたという人に対して

アッカー イゼン クスリバ {#ノモラッタター/

aQkaa izeN kusuri=ba {#nom-or-aQ-ta=taa/

2単:主題 さっき 薬 = 対格 {#飲む-継続-ラル-過去 = 終助詞/
ノモッタター}。

nom-oQ-ta=taa

飲む-継続-過去 = 終助詞

「おまえはさっき薬を飲んでいたよ。」

(7)・(8)は聞き手に対する同意を求める文脈, (9)は聞き手に対して指摘をする文脈である。(7)のニヤーは標準語の「ね」にあたるような“同意を求める”形式であり, 目下に対して使用するものである。また, 上位者に対してはラルを用いることがあるが, 必須のものではなく, 話者にとってはどちらでもよいという回答が得られた。また, 終助詞にも差は見られないため, 目上と目下で敬語の切り替えは明確

には見られない。(9)でもやはりラルの使用は必須のものではない。ここでもラルの使用の遂行義務性が高くなく、終助詞を含めても（ニヤを目上に使わないということはあるが）聞き手に応じた言語形式の違いは、明確には見られない。

3.3 第三者待遇

本節では、待遇する人物が発話場にはいないときの第三者待遇場面について述べる。第三者待遇では、ラルが頻繁に見られる。ラルは基本的に上位者に対して用いるものである。

- (10) 独話, 主語 = 上位者

アノ センサー ヨカ フク キトラルナ。

ano seNsee jo-ka huku ki-tor-ar-u=na.

あの 先生 良い-非過去 服 着る-継続-ラル-非過去 = ナ

「あの先生、いい服着ているな。」

- (11) 聞き手 = 家族 (配偶者), 主語 = 上位者

タローサン リョコーニ イカットカ。

taroo-saN rjokoo=ni ik-aQ=to=ka.

太郎さん 旅行 = 与格 行く-ラル: 非過去 = 準体 = カ

「太郎さん (上位者) は旅行に行くのか。」

第三者待遇ではラルを用いた回答が第一回答から見られる。聞き手待遇では、第一回答でラルを用いた回答が見られることはほとんどなかったため、第三者待遇のラルは、話者の中でも意識にのほりやすい形式であることがわかる。

なお、(12)のように第三者待遇でも助詞カナが見られることがある。これについては4節でも検討するが、論旨を先に述べれば、ここでのカナは聞き手待遇のときに現れたカナとは機能が異なる別語と考える。

- (12) a 聞き手 = 家族 (配偶者), 主語 = 上位者

タローサン テガミ ナンカイデ {カカッ}フーヤツタナ /

taroo-saN tegami nanikai=de /kak-aQ=huu=jaQ-ta=na /

太郎さん 手紙 何回 = 具格 {書く-ラル: 非過去 = 様態 = 繫辞 - 過去 = ナ /

カカッ}ヤローカナ / カクトカナ}。

kak-aQ=to-jar-oo=ka=na / kak-u-to=ka=na}.

書く-ラル: 非過去 = 準体 - 繫辞 - 推量 = カ = ナ / 書く-非過去 = 準体 = カ = ナ}

「太郎さん（上位者）は月に何回手紙を書くのか。」

- b 聞き手=家族（配偶者），主語=下位者

テガミ {カクフーヤットヤナ／

tegami /*kak-u=huu=jaQ=to=ja=na*／

手紙 {書く-非過去 = 様態 = 繫辞 = 準体 = 繫辞 = 終助詞／

カカットヤナ／ カクトカナ}。

kak-aQ=to=ja=na／ *kak-u=to=ka=na*ʼ.

書く-ラル：非過去 = 繫辞 = ナ／書く-非過去 = 準体 = カ = ナ

「(月に何回) 手紙を書くのか。」

ただし、ラルのない表現も容認されており、やはりラルの遂行義務性は高くない。

3.4 行為指示

行為指示場面ではヤル(-jar)が用いられる。ヤルは、行為指示以外では他地域のことばとして認識されているが、行為指示ではよく用いられる。依頼ではクレルが必要であるが、勧めではクレルを用いない。ヤルがあれば、上位者に対しても命令接辞が接続した形で用いることができる。

- (13) 聞き手=上位者，依頼

- a ツイデニ コレモ モッテ {イッテ クイヤレ／

tuide=ni kore=mo moQte /*iQte kui-jar-e*／

ついで = 与格 これ = も 持つ：中止 {行く：中止 くれる-ヤル-命令／

イッッッテ クレンカナ?}

iQtaQte *kure-N=kana*ʼ.

行く：中止：やる：中止 くれる-否定 = カナ

「ついでにこれ（回覧板・イベントのちらし等）も持って行ってくれ。」

- b コノ ツカイカタバ オシエテ クイヤレ。

kono tukaikata=ba osie-te kui-jar-e.

この 使い方 = 対格 教える-中止 くれる-ヤル-命令

「この（機械の）使い方を教えてくれ。」

- c コノ ツカイカタバ ユーテ カセンカナ。

kono tukaikata=ba juute *kase-N=kana.*

この 使い方 = 対格 言う：中止 かす-否定 = カナ

「この（機械の）使い方を教えてくれ。」

(14) 聞き手=上位者, 勧め

a カシデモ {タベヤレ/ タベントカナ}。

kasi=demo /tabe-jar-e / tabe-N=to=kana/.

菓子=でも {食べる-尊敬-命令/ 食べる-否定=準体=カナ

「(お腹がすいたなら) お菓子でも食べる。」

b カサ サシテ イカンカナ。

kasa sas-ite ik-aN=kana.

傘 さす-中止 行く-否定=カナ

「(雨が降っているから) 傘をさしていけ。」

(15) 聞き手=下位者, 命令

グズグズ セジン ハヨ {セー/センカ}。

guzuguzu se-ziN hajo /se-e / se-N=ka/.

ぐずぐず する-否定・中止 早く {する-命令/する-否定=カ}

「ぐずぐずしないで早くしろ。」

上位者に対する行為指示で、命令形を用いるときはヤルを必ず用いる。ヤルの遂行義務性は高いと考えられる。ただし、(13b)のオシエテクイヤレは、話者によれば“命令口調”の表現であり、(13c)のようにカナによって待遇することもある。これは、疑問文による間接的な行為指示と考えられるが、上位者に対しては助詞カナを用いる点は通常の疑問文と変わらない。

4 助詞ナの利用

4.1 里方言との共通点

ここまで、平良方言の敬語の運用においては、疑問の助詞カナの遂行義務性が高いという点を確認した。本節では助詞ナの文法的位置づけについて、もう少し考えておきたい。

ここで、里方言の状況を参照しておく。里方言において、助詞ナは疑問で用いられるものと、平叙文で用いられるものの2種類が観察される(森・平塚・黒木(編)2015⁽⁶⁾)。筆者の平良での調査でも、疑問文で用いられるナと平叙文で用いられるナの2種類が観察される。

まず、里方言との共通点について整理しておく。接続の面では、平良方言のナは動詞述語・形容詞述語・名詞述語のいずれにも接続できる。文のタイプを見ると、

勧誘文には接続するが、申し出、命令文や埋め込み文には接続しないという特徴があり、上記の特徴は里方言と変わらない。

- (16) a アイター サトニ テノンデ イコーヤナ。
aitaa sato=ni tenoNde ik-oo=ja=na.
 明日 里 = 与格 一緒に 行く-意志 = 終助詞 = ナ
 「明日里と一緒に行きましょう。」 《勧誘》
- b カセー {スーカ / # スーナ}。
kasee {su-u=ka / # su-u=na}.
 加勢 {する-非過去 = カ / # する-非過去 = ナ}
 「手伝おうか。」 《申し出》
- c アッチャミヤ {イケ / # イケナ}。
aQca=mjaa {ik-e / # ik-e=na}.
 あっち = まで {行く-命令 / # 行く-命令 = ナ}
 「あっちへ行け。」 《命令文》
- (17) a アラー ドケー イタロー {φ / カ / # ナ}
araa dokee i-taroo|=φ / =ka / # =na|
 あいつ:主題 どこ:与格 行く-過去推量 |= φ / =カ / # =ナ|
 ワカラン
wakar-aN.
 わかる-否定
- b アラー ドケー イタト {カ / # ナ} ワカラン
araa dokee i-ta=to |=ka / # =na| wakar-aN.
 あいつ:主題 どこ:与格 行く-過去 = 準体 |= カ / # = ナ| わかる-否定
 「あいつはどこへ行ったかわからない。」 《埋め込み文》

4.2 里方言との相違点

まず、疑問のナについて、平良方言では、ナはそれほど使うことが多くないと意識されている。里方言においては、ナは真偽疑問文に偏って使用されているが、平良方言では、真偽疑問文・疑問詞疑問文の両方でナが用いられる。

- (18) a コン ヘヤ ヌッカ {カ / ナ}。
koN heja nuQ-ka|=ka / =na|.
 この 部屋 暑い-非過去 |= カ / =ナ|

「この部屋は暑いか。」

《真偽疑問文》

b アイタ ヤクバニ イクト カ／ナ。

aita jakuba=ni ik-u=to/ka / =na/.

明日 役場 = 与格 行く-非過去 = 準体 | = カ / = ナ |

「明日役場に行くか。」

《真偽疑問文》(再掲)

(19) a アラー ダイ カ／ナ。

araa dai/ka / =na/.

あれ:主題 誰 | = カ / = ナ |

「あれは誰か。」

《疑問詞疑問文》

b イマカラ ドケー イクト カ／ナ。

ima=kara dokee ik-u=to/ka / =na/.

今 = 奪格 どこ:与格 行く-非過去 = 準体 | = カ / = ナ |

「今からどこへ行くのか。」

《疑問詞疑問文》

平叙文に使われるナは同意や確認を表す文に接続する。同意を表す文ではニャーも接続するが、ニャーよりもナのほうが丁寧な形式であり、ニャーは年下に対して、ナは年上に対して使うと意識されている。

(20) [あの頃はよかったなあと] 言われて]

ホンニ アン コラー ヨカッタ ナー／ニャー。

honN=ni aN koraa jo-kaQ-ta/naa / =njaa/.

本当 = 与格 あの 頃:主題 よい-動詞化-過去 | = ナ / = ニャー |

「本当にあの頃はよかったね。」

聞き手が事象について情報を持っている確認の文にも接続可能である。この場合も、目上に対しても用いることができる。(21)において、平良方言で、二人称代名詞オマエは目上に対して用いるものであるが、目上の相手に対してもナが用いられていることがわかる。

(21) [道行く子どもを指さして]

アラー オマエノ マゴナ。

araa omae=no mago=na.

あれ:主題 2単 = 属格 孫 = ナ

「あれはあなたの孫か。」

カナを用いるときは話し手が子どもについて情報を持っていない(誰の孫かわからない)ときであるという。

これらの助詞は問いかけの程度に違いがある。カヤナは疑問でも使われるが独話でも用いることができ、疑いを表す。一方で、カナやニャーは常に聞き手に対して質問しているという解釈となる。

(22) a アン フター アタリマエー

aN hutaa atarimae=e

あの 人:主題 当たり前 = 与格

イキヤ ナッタト {カ/ナ}

ik-i=ja naQ-ta=to/=ka / =na/

行く-名詞化 = 主題 なる-過去 = 準体 | = カ / = ナ

「あの人はちゃんと行けたかな。」

《疑い》

b アン フター アタリマエー

aN hutaa atarimae=e

あの 人:主題 当たり前 = 与格

イキヤ ナッタト {カニャー/カナ}。

ik-i=ja naQ-ta=to/=ka=njaa / =ka=na/.

行く-名詞化 = 主題 なる-過去 = 準体 | = カ = ニャー / = カ = ナ

「あの人はちゃんと行けたかな。」

《問いかけ》

このように平良方言のナも里方言と同様に平叙文と疑問文に用いるナが認められる。疑問文のナは丁寧な助詞として考えられているが、意識の上では衰退していると捉えられている。一方で、平叙文のナは独話でも用いることができ、聞き手目当ての性のない助詞である。(12)のカナはこの平叙文のナを利用したものであり、平叙文を聞き手に向けることで質問していると考ええる。

5 平良方言の敬語の位置づけ

5.1 標準語の敬語と疑問助詞

ここまで、平良方言において遂行義務性の高い敬語は、聞き手場面における疑問助詞カナ、および行為指示場面における主格待遇接辞ヤルであり、主格待遇接辞ラルの運用は義務的ではないこと述べた。さて、このような運用は標準語と比較して、あるいは、日本語の諸方言の中でどのように位置づけられるだろうか。

まず、標準語の敬語について考えると標準語の敬語は歴史的に見て、基本的に「られる」、「なさる」、「お」等の敬語接辞やその組み合わせ「お~になる」、「お~する」

が用いられている。それらの形式は、少なくとも聞き手場面では遂行義務性が高いという点で、平良方言との違いがある。一方、疑問助詞についても、基本的に用いるがなくてもよい（「先生もいらっしゃいますか／いらっしゃいますか？」ただし、助詞なしは親密さが感じられる）という点で、運用は必須のものではなく、これも平良方言とは異なっている。

5.2 諸方言における疑問助詞の運用

5.2.1 『方言文法全国地図』に見られる疑問助詞の待遇差

それでは、日本語諸方言の中で、平良方言の敬語の運用はどのように位置づけられるだろうか。本節では『方言文法全国地図』（以下 GAJ）のデータを用いて、疑問助詞の運用について考えたい。GAJ のデータでは、ある形式の使用の情報は示されているが、それ以外の形式の使用における適切性はわからないため、遂行義務性については確定できないことが多い。しかし、地点数の多さや地域的なまとまりを考慮すれば、日本語諸方言の類型的な把握に示唆を与えるものである。

GAJ では、疑問文が扱われている項目がいくつかあるが、ここでは、質問番号 242 番の回答について考える。調査文は以下の通りである。

- (23) 親しい友達にむかって、「これはお前の傘か」と聞くとき、「お前の傘か」の
ところをどのように言いますか。

この質問に対しては、対称詞「お前」（333, 335, 336 図）、準体助詞「の（傘）」（334, 337 図）が地図化の対象となっており、疑問の助詞の分析は管見の限り行われていない。

この質問は聞き手を変更して、O 場面（親しい友達にむかって）、A 場面（近所の知り合いの人にむかって、ややていねいに）、B 場面（この土地の目上の人にむかってひじょうにていねいに）の 3 場面が調査されている。そのため、聞き手の違いによる待遇表現の違いを観察することができる。本節では、O 場面と B 場面の差に着目した。

5.2.2 回答のパターン

回答語形の「お前の傘」より後の部分を抽出し、準体助詞・コピュラ・推量辞を除いた終助詞部分を分析の対象とした。そのうえで、関連する語形は統合する処理をした。例えば、カに関連した助詞として、ka, ga, kai, kae, ke, ke: 等が抽出されたが、本節の調査では区別せず、カに統合した。統合の結果は図 3 の凡例の通

りである⁽⁷⁾。

O場面とB場面の組み合わせを見ると、助詞が一致した地点が571地点、助詞が異なる地点は205地点あった。なお、片方に無回答があり、判定できなかった地点が4地点あった。特に多かった回答パターンを示すと表1の通りである。

表1 疑問助詞の回答パターン

地点数	パターン		回答例		
	O場面	B場面	地点	O場面	B場面
23	カ	カネ カノ	長野県下水内郡 栄村	ware no kasa <u>ga</u>	omesan no kasa <u>gane</u>
22	カ	カナ	鹿児島県揖宿郡 喜入町	waiga kasa <u>ka</u>	omažsa:n kasa zaddogana:
16	カヤ	カ	鳥取県東伯郡 大栄町	omaε no kasa <u>kaija:</u>	anta no kasa defo: <u>ka</u>
14	カ	カモシ/ カノシ系	山形県西置賜郡 飯豊町	nifanada <u>ga</u>	anda no kasa dabe <u>gaf̥i</u>
14	ナ	カ	佐賀県伊万里市 土井町	waino kasa <u>na</u>	anatar̥ kasa danfu: <u>ka</u>

5.2.3 回答の地理的分布

このような統合作業を経て、それぞれの回答パターンがどの地点に見られたのかを示したのが、図3である。図3を確認すると、O場面とB場面で疑問助詞の切り替えが見られる地点はある一定の地域的まとまりを持っていることがわかる。例えば、山形県南部・宮城県南部・新潟県北部では、O場面でカ、B場面でカモシ/カノシ系列を用いる地域のまとまりがある。また、長野県・愛知県・岐阜県を中心とする中部地方では、O場面でカ、B場面でカナ・カネ・カノを用いる地域がまとまって存在する。

また、九州地方、特に佐賀県・熊本県・鹿児島県にかけての九州西南部地域でも、切り替えの方法はさまざまであるが、O場面とB場面で疑問の助詞が切り替わる地域がまとまっている。本稿で取り上げた甌島の付近でも、熊本県牛深市牛深町・鹿児島県揖宿郡喜入町・鹿児島県揖宿郡穎娃町において、O場面でカ、B場面でカナを用いるとする回答が見られる。平良方言の回答はこのような九州西南部地域で助詞の待遇差があることと連続的に捉えられる。

G A J「お前の傘か」 疑問助詞

I 区別なし

O場面＝
親しい友達に
むかって

B場面＝
この土地の
目上の人にもかって
ひじょうにでないに

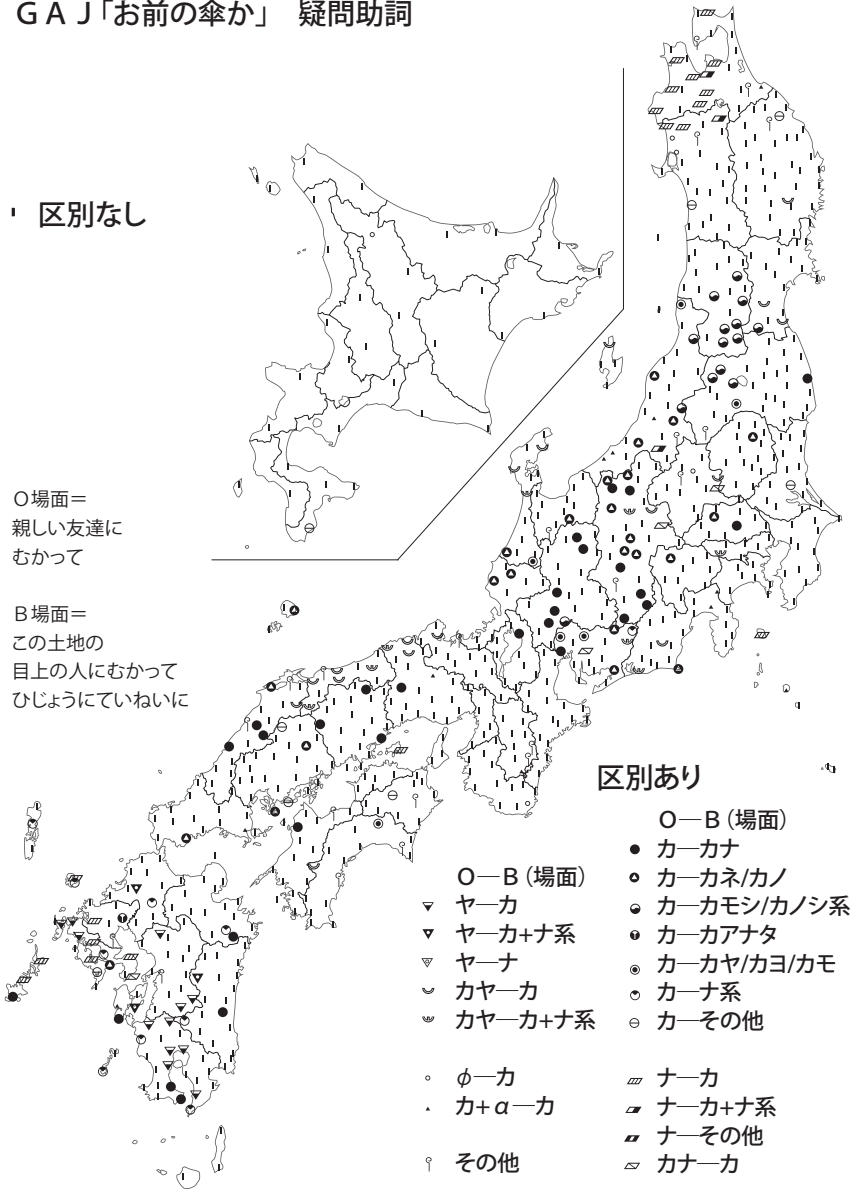


図3 疑問助詞の切り替えの地域差

5.3 方言記述からの示唆

また、他の記述・調査から、平良方言のような敬語の運用が行われていると考えられるところもある。甌島内で特に類似性があると思われるのは、下甌島手打方言（浜地域の方言）である。手打・浜方言では、平良方言と同様、聞き手に対しては終助詞カナ、あるいはカオを用い、目下にはカイを用いる。一方、第三者待遇ではラルが用いられている⁽⁸⁾。他の九州方言⁽⁹⁾の中でも、疑問文における助詞の使用が重要となるところがある。上村（1970）によると、五島列島方言でも、終助詞カナを用いることが丁寧さを表す上で重要だという。

また、聞き手待遇において尊敬語接辞を用いず、助詞の運用を重視するという点では、滋賀県甲賀郡水口町八田方言との類似性が注目される。宮治（1985）によれば、八田方言には主格待遇表現として、ハル・(ラ)ル・ナハル・レル等の形式があるが、聞き手待遇においてその使用は少ない。一方、第三者待遇では、敬語を用いない形式で待遇することは少なく、多くの人が(ラ)ル・ヨル・ハル等の主格待遇接辞を用いるという⁽¹⁰⁾。ただし、聞き手待遇で目上にも目下にも全く同じ言い方をするのではなく、例えば57歳男性(Ma家)は目上の人物には「(どこに)イクノエ」と尋ねるのに対し、話し手より年下の人物にはどこに「(どこに)イクノヤ」と尋ねている。宮治（1985）によれば、親しい人物に対する上向き待遇の助詞として「ノエ、ネエ、ネー」、親しい人物に対する、下向き待遇の助詞として「ノヤ、ネヤ、ネ」があり、これらを聞き手によって使い分けているという。

五島列島方言・八田方言ともに、平叙文においてどのような運用が行われているかの記述はなく、また、遂行義務性の程度も判然としないので、平良方言との共通点・相違点をはっきりさせることはできない。しかし、このような方言の存在は、平良方言のような運用が、日本語の敬語におけるひとつの類型として捉えられるのではないかということを示唆する。

平良方言の運用は、疑問文や行為指示といった、聞き手に対して何らかの働きかけを行う場面に限って、遂行義務性の高い敬語形式を用いるという運用法である。これは里方言や(かつての)標準語のように、どのような場面においても、どのような文タイプにおいても遂行義務性の高い敬語形式を持つという運用法とは異なるが、聞き手に対して働きかけるときのみ言語的配慮を行うという点では合理的ともいえる。

6 まとめ

本稿では、平良方言の敬語について述べた。まとめると、表2の通りである。

表2 平良方言の敬語のまとめ

	聞き手待遇			第三者待遇
	平叙文	疑問文	行為指示	
ラル -(r)ar	○ほとんど 使用されない	○ほとんど 使用されない	×	◎よく使用されるが 遂行義務性は高くない
ヤル -jar	×	×	◎遂行義務性が高い	×
カナ =kana	※意味的に 使用できない	◎遂行義務性が 高い	※疑問文による 間接的な行為指示	※第三者を待遇する 形式ではない

また、疑問助詞に待遇差を持たせる方言は、南東北地方、中部地方、九州地方などまとまって存在しており、平良方言の運用は九州西南部方言と連続して捉えられること [→5.2節]、また、平良方言のように疑問文の助詞の運用が重要視される方言は五島列島方言や滋賀県八田方言など、一定数見られるのではないかということ [→5.3節] を述べた。

筆者は歴史的に平良方言の運用がどのように形成されたかについても関心を持っているが、これについては今後の課題としたい。

注

- (1) 調査に際しては、人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」の文法調査班の協力を得ている。なお、その研究成果としては森・平塚・黒木（編）（2015）で里方言の記述文法書をまとめている。
- (2) 「薩摩川内市 | 統計データ」
<http://www.city.satsumasendai.lg.jp/www/contents/1300087101977/> による。
その他の主な集落の人口は、里町 1203 人、下甕町手打 688 人、下甕町長浜 780 人などとなっている。
- (3) 森・平塚・黒木（編）（2015）7.4 節。酒井雅史氏と筆者が執筆。
- (4) ただし、荒木（1970）の昔話において蘭上の話者（岸はる氏）の語った昔話にラルがある。

[i] 「只呉れんならあ、こん柿ん種と換えて呉れえ」て、猿どんが言わったあて

なあ。

(昔話、猿と蟹：94)

- (5) 例文は表層形をカタカナと音素表記で記し、グロスと標準語訳を付す。なお、音素表記・グロスは、森・平塚・黒木（編）（2015）に記述された里方言の状況を参考にして付している。平良方言の全般的な調査はまだ行えていないため、平良方言の分析として不適當な点がある可能性は否定できないが、読解の便を考えて付しておいた。
- (6) 森・平塚・黒木（編）（2015）7.7.2節。白岩広行氏・野間純平氏が執筆した。
- (7) 複数回答のあった地点は、特にカの有無を重視して、一致・不一致を判定した。例えばO場面・B場面の両方からカが抽出されれば、カナ・カヤ等他の助詞が併用されていても、ともにカを用いていることを重視し、一致するものとして扱った。
- (8) 2014年に酒井雅史氏が調査した。話者は1926（昭和元）年生の女性である。17歳から29歳までの間のうち、約5年間姫路・大阪・熊本に外住歴がある。
- (9) 九州方言で疑問助詞の使い分けを持つ方言が多いことが関連している現象として、行為指示表現における否定疑問形の運用を指摘しておきたい。西日本諸方言では話し手の想定と矛盾している（矛盾考慮、井上1993）際に用いる命令表現として、広く否定疑問形が用いられるが、九州方言ではそのような想定の有無に関わらず否定疑問形が用いられる。これは否定疑問形に用いる疑問助詞の待遇差によって話し手の想定の有無を伝えることができるために起きた現象だと捉えられる。
- (10) なお、宮治（1985）の調査結果を見る限り、八田方言の（ラ）ルは、おおよそ30～40歳以上の人物に対して用いられているようで、話し手よりも年上か年下かという条件はあまり影響していないように見える。

資料

昔話 荒木博之（編著）（1970）『甌島の昔話』昔話研究資料叢書5，三弥井書店

参考文献

- 井上史雄（1981）「敬語の地理学」『国文学 解釈と教材の研究』26-2，pp.39-47，学燈社
- 井上優（1993）「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」—命令文・依頼文を例に—」『国立国語研究所報告105研究報告集』14，国立国語研究所

- 上村孝二 (1954) 「鹿児島県下の表現語法覚書」『鹿児島大学文科報告』3, pp.263-288, 鹿児島大学 (引用は上村 (1998) に拠る)
- (1970) 「五島列島方言の表現文法」『鹿児島大学法文学部紀要 文科学論集』6, pp.33-64, 鹿児島大学
- (1998) 『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
- 東条操 (1953) 『日本方言学』吉川弘文館
- 西尾純二 (2015) 『マイナスの待遇表現行動—対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮』くろしお出版
- 宮治弘明 (1985) 「滋賀県甲賀郡水口町八田方言における待遇表現の実態—動作の主体に対する表現をめぐって—」『語文』46, pp.33-49, 大阪大学
- 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦 (編), 窪蘭晴夫 (監修) (2015) 『甌島里方言記述文法書』国立国語研究所

付記 本稿は人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」, JSPS 科研費 25884082, 26244024 による助成を受けたものである。言語地図の作成にあたっては、国立国語研究所による方言文法全国地図データ・プログラムを利用した。調査に際してご協力いただいた話者のみなさまに深く感謝申し上げます。

(もり ゆうた／本学准教授)